

赤嶺誠紀

進貢船物語

ある船頭の一生



進貢船物語

ある船頭の一生

赤嶺誠紀

筑摩書房

著者略歴

赤嶺誠紀（あかみね・せいき）

1938年那覇市西新町に生まれる。首里高校卒。

1975年、「世の中や」で文芸賞受賞（筆名・阿嘉誠一郎）

1979年、沖縄タイムス芸術選賞奨励賞受賞。

主な作品に『世の中や』（河出書房新社）、『大航海時代の琉球』（沖縄タイムス社）「時の流れに」「明日になれば」「ぬじふぁ考」「群星」その他がある。

現住所 浦添市沢岬677-1

進貢船物語

——ある船頭の一生——

一九九一年九月二十日 初版第一刷

著 者 赤 嶺 誠 紀

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 筑 摩 書 房

東京都台東区蔵前二一六-四

電話 東京（五六八七）二六八〇（営業）

東京（五六八七）二六七〇（編集）

振替 東京六—四一二三

カバー装画 金城安太郎

印刷・製本 中央精版

© AKAMINE SEIKI 1991 Printed in Japan

ISBN4-480-80302-5 C0093

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてに御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

一章	生い立ち	5
二章	船出	20
三章	漂流船	39
四章	接貢船沈没	50
五章	向開基船の漂流	72
六章	進貢船遭難	77
七章	海賊船	107
八章	接貢船の闘い	127
九章	江戸上り	153
十章	官生騒動	162
十一章	波高き福州沿岸	186
十二章	宴なき冊封	202

十三章 程朝中の殺害事件 227

十四章 海に散る 241

十五章 琉球館炎上 251

進貢船物語 — ある船頭の一生

中国の明清時代、琉球は中国皇帝よりの招諭を承り、臣と称して貢物を進呈する習慣があった。二年一貢とか五年一貢、或は十年一貢と、時代の歴史的な事件などの影響で年貢もいろいろと変化をみせたが、清朝の時代になってからは、ほぼ二年一貢と定着化した。この中国皇帝への貢物を運送する船が、進貢船であり、琉球国王よりこの使命を負わされて北京まで赴く人たちが、進貢使である。

一章 生い立ち

昂永基こうえいきこと山田筑登やまだ ちんどん之親雲上べえちんけんこう憲興けんきょうの出生の地は那覇の西村で、父親の名は昂頭親こうけんしん（山田筑登之親雲上けんえい憲英）といい、母親は浦添間切沢岬村の大城仁屋おおくしにやの女で、名を真鍋まなびといった。その長男として生を受けたのが、乾隆十年乙丑けんりゅう きのとうし（二七四五）の正月二十三日で、幼少期の童名は眞蒲戸まかまどと呼ばれた。（ちなみに、山田は采地さいち（地頭職として収入源の得られる土地の名）か名嶋なじま（地頭得分はなく、名目上だけの称号つき名前）による姓で、筑登之親雲上はその人の位階を示し、憲興が名である。）

この眞蒲戸が二回目の誕生日を迎えて間もない頃、母親の眞鍋は三十四歳で亡くなった。眞蒲戸

にとつては、だから、実母に甘えたという記憶はあまりなく、三つ年上の姉の真牛と、八つ年上の姉の思仁王の二人が、遊び相手でもあり、また何かにつけて母親がわりでもあった。

父親の昂顯親は船乗りで、主に楫船に乗って薩摩との間を往き来していたが、年齢は亡き母親とちょうど同じで、いわゆる男盛りの年頃にあった。久しぶりに航海からもどってきて、父親は留守居をつとめた幼い子供たちに構うようなこともなく、汗と潮の香を体中から発散させながら、辻や仲島などの花街へと足を向けるのだった。

ある日、こんなことがあった。夜もだいぶ更けていたが、花街から泥酔状態で家に帰ってきた父親は、何か虫の居所が悪かったらしく、帰宅早々、大声でわめいたり、雨戸や壁板を足で蹴ったりしていた。こわくなつて真蒲戸が泣きだすと、上の姉の思仁王がしっかりと真蒲戸を胸に抱きしめてくれた。真牛までも泣きだしたので、思仁王は右手で真蒲戸を抱き、左手では真牛の手を引く格好となつて、裏座のほうから闇夜の外へと飛び出した。家の中から外へ出ると、夜気は冷たかったが、姉の思仁王の懷は暖かかった。そして真蒲戸が、暗い中で姉の顔を確かめようと眼を開いたとき、その眼にとまったものは、降るように輝く星空であつた。星空は、暗い家の廂を境にして、廂より外側に向けて大きく広がっていた。家から遠ざかるにつれ、星空は広がりをまし、そこで輝く星の一粒一粒が、まるで真蒲戸の涙を吸い取ってくれるかのように見えた。

そんなこんながあつて後、父親の昂顯親は後添いをさがすのであるが、それが、どうもうまくいかなかった。

西原からきたはじめの継母は、昂永基の下に次男の昂永泰（憲保）を産んで後、離別して実家にもどつた。

次いで豊見城とみぎからやってきた継母は、三男の昂永こうえい発はつ（憲伯けんはく）と四男の昂永忠こうえいちゅう（憲用けんよう）、それに三女にあたる真蒲戸の三人の子を出産して後、四十六歳で他界した。

三番目に那覇からもらった継母も、五男の昂永功こうえいこう（憲紀けんき）を産んで後、離別。

そして、四度目の継母が那覇泉崎村いずみざきの儀間仁屋の女・思戸うみどであるが、この思戸と父親とは、年が二十もかけ離れていた。勿論、これは、昂永基が長じて後のことであるが。

継母が家を飛び出し、次の継母を娶るまでの間、父親の生活はきまって荒れた。夜昼かまわず酒を飲んで、家の中で暴れ、その度に、家に居たたまれなくなった幼い子供たちは、西の海へ行つて浅瀬で小魚を追ったり、蟹などを採ったりして、すさみがちな気持を遊びにまぎらわせた。時には、黄昏どきになつても家に帰ろうとはせず、三重城の崎の岩の上に坐して、はるかな慶良間の島々の上に沈みゆく紅い夕陽に見とれた。暮れなずむ街の屋根屋根の上には、夕餉仕度の煙がかすかに棚引き、ふり返つてその景色を眺めると、にわかに空腹感を覚え、また何とはなしに人恋しさに誘われた。

そんな時、姉の思仁王はよく実母の思い出話をしてくれた。

発熱した時など、母がこしらえてくれた芭蕉汁が非常においしかったこと、母が織る上納布はきめが細やかで、隣近所でも評判がよかったこと、母は死ぬ間際まで幼い真蒲戸の行く末を案じ、その名を呼び続けていたこと、……それがたとえ以前に聞いた話であっても、それはいつも新鮮なものとして真蒲戸の胸に響いた。そして、姉の話の中にでる実母の面影に思いを馳せつつ、あの夕陽の沈みゆく慶良間へ行つてみたい、と思つた。

いや、慶良間とは限らず、さらに遠い西の国（大人たちはその国を唐と呼ぶ）へ行つてみたくな

った。海の方こうのずつとはるかな西の国へ行けば、姉たちの語る実母にほんとに会えるかもしれない、そんな気がした。

その祈りにも似た思いは、幼年期よりも少年期にかけて一層つのり、唐の国から進貢船がもどってきたと聞けば、真蒲戸は一目散にその船の眺められる場所へと走って行った。船が、母親のようにも思えた。

真蒲戸が十二歳になった時、あの遠い西の国から唐按司（とうあんじ）（冊封使（さつほうし）。中国皇帝が琉球国王を臣下として認定する式典に、中国から派遣されてくる使者のこと。琉球ではこれを「唐按司」と称していた）がやってきた。

乾隆二十一年（一七五六）七月八日のことである。

その日の那覇の街は、まだ夜も明けきらぬ明（あ）く暗（く）ろうの頃からどよめいていた。

筑佐事（ちくさじ）（首里王府の平等所につとめる下級警官廷吏）たちは銅鑼鉦（どうらけい）を打ち鳴らしては、「唐船（とうせん）どおい！」と、甲走った声で触れまわっていたし、それに呼応して勇み立った街の衆は、ある者は法螺貝を吹き鳴らし、またある者は指笛を吹いたり、爆竹を打ち鳴らしたりして、街中はそれこそいたるところ、喧騒と興奮の坩堝（るつぽ）と化していた。

父親の昂頭親は、こういうことにかけてはひと一倍興奮しやすい性質（た）だったので、最初の銅鑼鉦の音を聞くやさかさず飛び起き、まだ夢の中にいた真蒲戸を無理矢理に起こすと、はだけた着物を着けなおすいとまらない間に外へ飛びだしていた。

真蒲戸が物心つくようになってから、父親を身近に感じたのは、この時がはじめてだったような気がする。

父親はかるがると真蒲戸を持ちあげるや、ひょいと肩車し、また近所の船乗り仲間たちも呼び集めてその先頭に立ち、前もってこの日のために準備していた西の海の杉板舟置場へと急いだ。

東の空が白々と明けそめる頃には、那覇港内はまるで国中の舟が蟬集してきたかのような観を呈し、陸上の興奮と喧騒はそのまま海上までも引きつがれていた。そして、首里の高台に太陽がのぼりはじめると、沖合いの冠船（冊封使一行の乗る船）の帆影がはっきり確認でき、杉板舟の群れはその帆影の方へと漕ぎだした。

本来なら、頭号船、二号船と、二隻の冠船の帆姿が現われるはずであつたが、二号船は途中で風に遭つてやむなく福州に引つ返したとかで、今回姿を見せたのは、頭号船の一隻にすぎなかつた。

その頭号船にしても、久米島に寄港した際に暴風雨に遭つて船は難破し、その替わりとして、琉球の貢船が冠船の代役を勤めていたのである。ともあれ、冊封使者が乗船している以上は冠船に相違ないので、那覇港に在つた無数の杉板舟はこの冠船を取り巻き、船の舳先に太い綱をわたして、曳航しはじめた。杉板舟の群れから喚声があがり、指笛が吹き鳴らされ、冠船と杉板舟の群れが一体となつてゆっくり進む。それらの杉板舟の先に、真蒲戸の父親の舟があつた。

日頃、酒飲みの父親ばかりを見てきた真蒲戸は、この時の父親の活躍を見て、いつもとは違う感動を覚えた。ずば抜けて体格の大きい父親の指揮の下に、ほかの大人たちは櫂を漕いでいたし、父親が小指を口に当てて吹き鳴らす指笛もまた、ひととき鋭く響きわたつた。真蒲戸は、こんな父親の姿をかつて見たことはなかつたし、こんな堂々とした父親を見ていると、何となく鼻が高くなつた。杉板舟の群れに牽挽されて、冠船が唐船口から那覇港内に進入してきた頃には、三重城やその対岸の屋良座森城の周辺は、もう足の踏み場もないくらいに黒山の人だかりだつた。冠船が那覇港内

に入るや、この群集の中から歓呼の聲が湧きあがり、銅鑼鉦は乱打され、爆竹がはぜ、人々の興奮はいやが上にも高まった。

冠船が迎恩亭の前に横着けされると、曳航してきた杉板舟の群れは綱をほどき、冠船から離れた。真蒲戸は、父の舟に乗ったままで、海上から冊封使一行が上陸するのを見守った。太陽は灼けつくように暑いが、群集は暑さなどものともせず、この一瞬を待っていた。

太陽がそろそろ天頂に達し、潮水も満潮になりかけた頃、迎恩亭の左右両側に整列した首里王府のその係りの役人たちが金鼓を打ち鳴らしはじめた。いよいよ冊封使一行が上陸する時がきたようである。

冠船の上には、まず五人ばかりの中国人の官人が現われ、それぞれ何やらの品物を大事そうに捧持して、船と迎恩亭との間に架けられた板橋を渡って上陸していた。

大人たちはそれらの品物が、詔とか、勅とか、御書とか、諭祭文とか、節とか言うものだろうと口ぐちに話し合っていたけど、真蒲戸にはそれが何のことなのか、まだよくわからなかった。

再び金鼓が打ち鳴らされ、それと同時に、礼砲が三発撃たれた。その余韻もまだおさまらない頃、父はやにわに船上を指さすと、

「あの方がたが、唐按司さまだ」と声をはずませて言った。

船上には、きらびやかな麟麟服りんりんもうちやくに身を包んだ二人の中国人が立っていた。

この時、これまでに倍するような歓声が、陸上といわず海上といわず、冠船を取り巻く群集の中から起こった。礼砲がまたも三発撃たれたが、その砲音さえもかき消すくらいの人々の歓呼の声であった。

二人の唐按司は、それから悠然とした足取りで船を降り、迎恩亭の中に入ってしまった。そこには、烏紗帽をかぶった礼服姿の王世子尚穆が控えていて、尚穆は立って中央にしつらえられた香案（机）の前まで進み行き、そこで二人の唐按司に対して三跪九叩頭の礼を行っていた。尚穆は、真蒲戸より六つ年上の十八歳であったが、立居振舞いも落ち着いていて、その物腰にはもうすでに國王としての風格がにじみでているように見えた。

ときに、この尚穆を國王に封ずるために、はるばる北京からやってきた左按司（冊封正使）は、翰林院侍講の全魁であり、右按司（冊封副使）は翰林院編輯の周煌であった。この正使の全魁は、満州の鑲白旗出身で、乾隆十六年（一七五二）に進士になった人物であり、また副使の周煌は四川涪州の出身で、乾隆五年（一七四〇）に進士となり、翌年には山東の郷試副考官に就任、ついで会試同考官や雲南郷試正考官などを歴任した経歴の持ち主である。

迎恩亭の中で、ひと通りの挨拶を済ますと、さっそく二人の唐按司の前に、各々八人の男で担ぐ轎がまわされてきた。正使と副使はそれぞれの轎に乗り、ほかの従客や従者等は馬に乗って、まずは逗留先の大使館へと向うのである。この一行を先導するのは騎馬の儀衛二人で、その後には王府の役人たちを従えた世子の尚穆が馬に跨がって続き、さらに牌持ちやら旗持ちやらも続き、中国人二百余名、琉球人三百五十名にも及ぶ行列であった。

大使館は、俗に館屋とも呼ばれ、その門の両側には、旗竿の上に「冊封」と書かれた黄旗が高だかど掲げられていた。一行の行列もこの大使館の門前が終点で、ここで唐按司等は轎を降り、詔や勅、節、印などを捧持して、館内に消えた。

父の舟から陸にあがった真蒲戸は、行列の後を追ってここまでは見届けたものの、その先のこと

は知らなかった。筑佐事たちが天使館の周囲を警戒してまわっていて、そこから先へは一步も進めなかったのである。

この冊封使一行の滞在中に、輜傘夫（かごかきや傘差し人夫）とか水梢（船員）といった中国人等が、たまたま街の通りで露店を開いたりしていた。櫛とか針などの日用品を売る者もいれば、鍋料理や揚物をこしらえて売る者もあった。

好奇心にかられてそんな出店を覗いているうちに、真蒲戸はいつしか中国人等と親しくなった。最初のうちは身振り手振りで何とか意志を通じ合っていたが、そのうちに片言の中国語を話せるようになった。話が出来るとなると、一層親しみが湧き、真蒲戸は時には自分の家に連れて行ったりした。

唐按司等はしばしば首里城に招かれて、何やらの宴を催しているらしいが、下っぱの水梢等はそれに参加することも許されなかったようで、そんな時、真蒲戸は水梢等から中国のいろいろな話を聞かされた。

中国の話を聞くにつれ、真蒲戸はますます中国へ行ってみたいという夢をふくらませた。そして、水梢の一人が何気なく冗談まじりに、自分たちが帰国するとき、一緒に連れて行ってやろうか、と水を向けた時、真蒲戸は本気になって、行きたい、と答えた。

七宴と呼ばれる行事も滞りなく終わり、あとは中国人等が持参してきたいろいろな品物を首里王府が買いあげる、いわゆる評価と呼ばれる貿易のみを残すところまできていた。とかく面倒の起ころがちなこの評価も、今回は事前に、摂政（国王の補佐役）、三司官（国政をつかさどる三人の宰相）や総理唐栄司（総役ともいい、久米村の長官）等が、天使館内で唐按司等と話し合いを持ち、早い時期に妥

結をみていた。

この唐按司一行が、帰国のために節と印とを奉じて新装なつた冠船に乗船したのは、秋の気配も濃い十月二十六日のことである。この日は、尚穆王自ら迎恩亭まで出向いてきて、名残りを惜しみつつ、唐按司一行の乗船を見守った。

なおこの冠船に随行して、琉球側の謝恩船（中国より冊封使が渡来して論祭や冊封式典を挙行して後、琉球国王より中国皇帝へ感謝の意をこめて派遣される使者一行の乗る船）と進貢船の二隻も渡唐することとなり、その正使や副使等もそれぞれの船に乗り込んでいた。

これら三隻の船が那覇港を出帆するのは、十一月七日である。この三日前に、真蒲戸は中国人水梢の手引きによって冠船にもぐり込み、船底の圧載（あつさい船の重石）の陰に身を潜めていた。無論、家族の者には内証であつたから、このことを知る者は、手引きしてくれた中国人水梢だけであつた。

出帆の当日も、見送人や見物人等が迎恩亭周辺にどっと押し寄せ、三重城や屋良座森城は浮道から崎にいたるまで、びっしりと群集に埋めつくされていた。

圧載の陰にじっと隠れていた真蒲戸は、一日千秋の思いでこの出帆の日を待った。その日がとうとうきたのだ。真蒲戸は胸をときめかせて、岸を離れる船の動きを感じとった。

ところが、沖合いに出るや、突然、颶風が発生し、三隻の船は暴風に襲われたのである。船底の積荷はぐらぐらと揺れ動き、船上におおいかぶさる潮水は、梯子を伝わって船底の真蒲戸の前まで浸水してきた。加えて、潮水が船板を叩く音が、まるで大砲の音のようにも聞こえ、真蒲戸はもう生きた心地もなく体をぶるぶる震わせていた。

この調子では、中国までの航海はとても無理で、三隻の船はやむなく那覇港に引返した。真蒲

戸もほかの中国人水梢に発見され、その身柄はただちに琉球人役人に引き渡されて、結局家にもどることとなった。

十一月二十日、尚穆王は那覇里主（里主は那覇市長にあたる職名）の翁士達（伊舎堂親雲上盛敵）を冠船に遣わし、中国への帰国は、来年の春の訪れを待ったほうがよからう、と進言した。

唐按司一行はこれを諾き入れて、ふたたび天使館に逗留することとなり、また謝恩・進貢両船の役職等も一応下船した。

この出港延期は、首里王府にとっては思いがけない厄介な重荷を背負いこむ原因ともなった。というのは、風に遭って福州にもどっていたあの冠船二号船が、今ごろになって那覇港にその船影を現わしたのである。十二月十二日の朝のことである。

単なる来航であれば、王府にとって何ら重荷ではないのだけど、彼等二百五十名もの中国人が持ち来たった品物を買い上げるとなると、これはもう一筋縄でいくような貿易ではなかった。

今回の冠船渡来に際し、首里王府が準備した評価銀は三百貫目でしかなく、そこで前もって唐按司等と話し合いを持ち、冠船が久米島で遭難したときの損失を補償する意味において、王府は恤銀二百五十貫目を贈ることで話はついていった。そこへ二号船がやってきたのだから、王府もあわてた。しかし、無い袖は振れず、結局ことわらざるをえなかった。

それでも中国人等はあきらめず、次のような要求を突き付けてきた。つまり、ここに渡航してくるまでに、相当苦勞を重ねたし、船も多くの損傷を受けた。その上に、洋上で二人の中国人が溺死するという事故もあったので、せめてその分だけでも補償してくれ、と言うのであった。こうした